

1 体用論とは

当流に伝わる書物の中で『体用論』は『修身論』と並んで、最も大切なものです。これらには、当流の一番の基本をおさえたことが記されていますが、特に『体用論』は「体」をいかに扱うべきかについて述べてあります。

体用論

是書所訓本躰之源探知樞要者也造次顛沛心不放不可忽焉者也晚生之未學何所知識積少貫熟而自得此意味須明物理之大意誠師弟伝授之心法也如是雖記其深理不有言語文字之間味無極然初學之士或有取焉則亦庶平行遠昇高之一助曰尔

この書に訓する所、本躰の源を探り知らんこと樞要とするものなり。造次顛沛「ぞうじてんぱい。『論語・里仁』にある「君子無終食之間違仁、造次必於是、顛沛必於是」による。君子

はとつさの場合やつまづいて倒れる場合でも仁から離れないの意からとつさの場合やつまづき倒れるとき。転じてわずかの時間のたとえで、つかのま】も心を放たざるをおろそかにすべからず。晩生の未だ学ばざる何ぞ知識するところにあらん。久しきを積み慣熟して自らこの意味



『修身論序』と『体用論本註』

を得れば、すべからく物理の大意を明らかにすべく誠に師弟伝授の心法なり。この如く記すといえども、其の深理言語文字の間にあらず。其の味極まりなし。しかば初学の士、或いは取る所あらば、即ちこいねがわくば、遠くおもむき高くのぼらんの一助となすべし。

この書は、「ほんたいみなもと本体の源を探知するもの」であつて「していでんじゅ師弟伝授の心法」であるとしていますが、しかし反面、その深理しんり（深い理論）は言語や文字の間にあるのではなく、その味は無窮むきゆうである。物事の理を明らかにして、その意味を体験自得することに努め、この内容から取ろうとするときには、「遠くを望み、自ら高く昇ろうと実行する」一助としての価値を見いだすよう努めるべきであると示しています。

この序文で言わんとしていることは、礼法の基本はどこにあるのか、その根源を説いたものと解釈されます。

内感者曰體
外應者曰用
論邪正論儀

體用論本註

夫陰陽五行者道之大本人
之性生所稟成之也其爲氣
天地和合而万物生人倫成雖

『体用論本註』の序文

内に感ずるは体といい、外に応ずるは用という。論は邪正を論ずるの儀

体用論とは「内に感ずるを体^{たい}と言い、外に応ずるを用^{よう}という。論は邪正を論ずるの儀」と示しているように、「体のあり方」「心のあり方」と身体の動きの関連を示しており、心のあり方が体にどのように応じ、それがどのように身体に表われてゆくかということに着目しています。

吉田和男著『現代に甦る陽明学』(麗澤大学出版会)には次のようにあります。

弟子の侃が先儒の説である『心の静を以て体となし、心の動を用とする』という言葉について質問します。王陽明は……(中略)……『動靜を以て体用の区分とすべきではありません。体について言えば、体は用にあり、用について言えば、用は体にあり、『体用一源』と言います。静を以て体、動を以て用と考えればいいのではないか』と言います(卷上109)。体とは本体のことです。用とは作用のことです。したがつて、一般論的には、静は本体をつかむための修養になり、動によつてそれが作用するという考えになるのでしょうか。朱子の議論に対して、体と用は一体であると言い、したがつて動静を区別する必要のないことを言つています。